俚諺清言

女今川

三

へ13
2914
3

新見

2914
3
特

深情婦女今川巻之三

俚言

江戸　南仙笑楚満人校

第五回

おあげく泪の暇こうも。御ひいみせうハ一私ハ
ちいさいとき　しんるい　うち　やくそくしたいなと。一昨年の暮ゑ
初ゆ時ゑ親類の内へ約束ゑ
まの　ぶきりょう
系ゑまゑ〜くびれこんゑ何ゑ不器用のめぐらう。
きたな　ぶえる　きき　きら　ひきうけ
先の且那の御氣ゑいらるゑので嫌ゑ是ゑまゑて引受
つてといふまゑで。ついゑ一度物ゑろくゑいゑず。正

昭和九年七月六日購求

月も夢のようなる暮しで。どうする事とありのうち
大くすの兄さまがあるくるり捜して流とりが来
ゐる内へ返事とあ犯がゆくをさんまのよ。日ひろう
やうくあ知捜がを出ゐ。ひさくくも一向沙汰な
ちよ。いつう道具もかくりきくこその時の準しきく
いつそ死んでもちまちまうと思の所よ。まこお母
さまがあるくるり捜して。そまちうふ城よ浮世
中よあきくくとちまくこ。こまるみんな私の嫁さま

悪いのとあきらめても来くまさぬト涙をこぼ
ちて嘆くていりをあ称もうまごをとがてて嘆も
居るぐら称「あまげきんそんるよ氣のようなのよ
だろりいつく。ひろうと死んごら言どのうさろく。
その嫁さまて男へつらあてよ。のひ死へ方なよ。
私どもの且那ハ慶く分人をうさろうら。ごんな
いひ死くでもいく男ハ乃事ふ来ふもはる
真ごいくらも女房を持ちとのの人があるうら。

私が世話をしてあげようぞ。そんな嘆くのは
人の良ハまゝ捨て。美男の男上のゝ通人ぞ嫌の
ある女うる人を見こと上形と二人して見て
あげようぞ。出来をたきつと。おのちよ。
ざーハ。ありがとうございますが。私ハどんなこのが
あるでせう。外ゝまをもろ良ハゝやでございます。今
時そんな結がある。めろト楽してゝの良ハ
ハ。ゝ目がさめることふりをして。「お孫まご嫁を

のゝ。ゝのるゝ。ゝの。ゝ。ゝと梅幸や團子郎が
物まねでもまたハ見るひらのひ加減よ。ゝるせく。そ
ハそのと何ぞ美味ものをこしらくさせるおあげ
きん今夜ハこちらくとまんをせく。「ゝんよおまん
るさのる。「又お世話よるが。ゝ毒でござの
ますゝ。「ゝく見ゝ。「お孫と二人寝る
がいひ。見こーハ今夜見る能楽があるゝらゝ
ゝも。ゝハおそくゝるゝ。ゝゝゝ。まゝず寝が

いひ、ト親仁をとまつまてく知り。浦よハお柳お
あげと彩しーまぐら「お柳さんやお茶お
を巨燵のそばくとろく屏風をよくえてく寒くるの
よのよーてあげやよ。私も寝るうら塩梅ゴロく
ハおとーておくまて。そーて私ハ一ッ呑で寝るから
ちろと炉をーておくまてよトりふ正く知れ寝
非を見ろ表まつみりて来る「お柳さま
ま且那さまハとまるとおろーもやりまーて是ハおあげ

きんへおあげゐさまて。おまへくさるもお待ら家ぞと
お体をゐさまーまーとおろ表やりまーて「ヲイく
ゴ苦労いく所ごつッ呑で寝や。つんやりつと炉を
表やト。美ーひ顔ぐく大酒をおもいまのんでおあげ
の憐へ大紛ふく寝て表ハ皆く片付て寝て
表りへ。あげハるまるよきて紀尾次郎ぶ紛れろりてろく
とあんーうねこる夜もふけて第引おずぶる様ふ表りも
おすぶぬ国の戸をくまろ風がおとづまてり戸をかーくさくゆへ
お柳をおとさんとんまでまたいひく寝へりしゆ表られぬ表りを
表とみんておれいで。お柳「且那さまく「ヲイ寝む

うろうが聲の哀ぐあるうらうとまらずよ飯て来さ
ト うちくすりくごくうふ寐さろ〜〜〜〜ト あぐをね〜〜
うくあくうるまるまるまるてあ祢がよく寐さようをと西系恋よあぐをを
ものをもいるまずひつまろてまるる西系あぐをもせひろ〜〜ひつまろ
まるて花花弟がこまるよ 花「あぐをうるぜそんるよぐまろ
ぐまろてまるろてある
ているまぐあまぐそんるよ悪ぐ〜とありてい
のく 春「イエ 花「そまでも恨ん〜そうよんく
いるてハ行くう 春「そまでもトいひるぐらとハ
ぐ変を知〜て。ごらく〜〜〜〜あ泪ふて。夢うと

思ふ存分でござります。トの変を驚身よ。お柳が
関付て。やつもあらんと身をこらして聴とも知
らず。後次郎「あづかふる世へ。お柳が紀でも
あてはるひ。ア。おめくのもよく聴て私が今と
何もいはずよ居こ。紙をたるして聴うそのうち。
とうとうずとあつと来へ来く。巨燵へあるる
さい「そまでも。お柳さんがひろと後「そよく
訳を聴る世へ。何もおめくを嫌ふ心はさらく

祝くがおめくも幼が時。ちとこしもまご子供の内
おめくの親父さんと私の祖父さるとと城よ中が
ようつく約束をしてこそ号をあこそそのぶ。おめく
の父さんと私が親父とハ中が悪く。城よ数回
士のようのごけまでも表向ハ本居と別家のつもご
うらあてこそ。貧易くもるのめく仏の内よ逃
よ。物があるようのす。そまでも祖父さるが約束
あこと意ごうら。あこと意ごうる引取く後妻をあこと

時まあのお父さんがおごらず女房を無茶
まへうるめくといろこと口上ぶ私が無茶まあこと
から。赤ぐろくる夏へあるめくと。そまとらぬ
香まあこのごス行赤ぬ時八人の後ま底
をつけくい実へあめくの為まるる。私ま男の
乃まそむくらつのこ変もいやいのことを
ちこ覚へへねく外へ縁付くよまと知をとめ
深切ハ実あめくを憎くおまハねく夏らおろこ

夏。そまを染ふと学ぶ。そんまよ眼
らまるへ。染まあげぶ結へ。ちこぶそのよまま
たのを見ると。掃ぶ一ッたのまるよ 一モウく何
ふもちませんまり雑ふどぎります。とくどの
まふまらく接バしても加体まのおうみちへ
きこしもどぎりません。何の関係ちこ年間へ
脱りまうてうる片時。まるまる夏まるの上ま
噂ます。受接バ〜まうころのぶ変〜つぐく

私のうるさくさとかきさろうゝ拝がゝ下さのまゝ
きざろうゝ今夜寒のおもひをして返うて来さ
のごよ。どうぞ早くあの病気をよくして内へ返
んなせ。そうすと夫婦うやうゝまれへうゝ練の
兄弟とやうく為よくく世話をして参らうよ。
うんでも桐七さんとおのれくのみせそをて
みゝそうる人をば私が兄弟に婚よゝて参らふ
うゝ。何でもそのあのくをとり変てうちへ

既つくゝトのつそすアイの詞もうく紙を渡バ渡ゝど
よ。ひとり塔ゝて夫行ひの掬まで世話人るは病
のつくよ。ものまのの家ず番次郎ぶ顔をんろめく
ある「是れど紙とのくく渡るのが氣よのら
絵のう。但ゝハのゝぬ世話ぶとおのの何のそん
まよ限めゝそうよ顔ぶうゝんてのぶまも。前の
ものも残らずたるゝうせく何もそんまよ素義世
ぶとのく変ぶ「変ぶを見けてのおうゝやうこ渡

りけてハおりますが。何ぞあるこのお世話でも内へ
ハつく舞を取る夏ハいやでどざります　「そ
れて親の恋ハ誰が立てるへ　「竹さんとのの子が
ありますうち　「マア馬鹿な夏をいの饗へ竹と
いふ男があることそろ子を恋くさくらまるあら。
充考くく見る世へトリけを言ひ嫌らまるでも
涙だりで返事もうくくのみ苦くげる「ぶ
ぞ拝んまう私のるハとても世でハあるこの

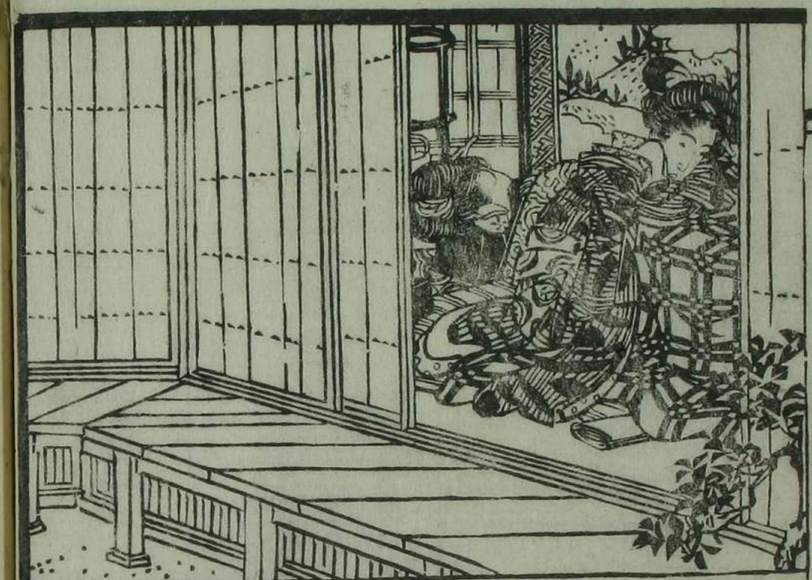
お饗る居る夏ハうりませんうう。竹さんをあるこ
の四子とらくくりて。お世話を拝ぶて下さのま
饗へあるこのお宅でも内ハ居まするハいやで
どざりますト当ひ切く強くいの西家次郎も
可哀そのとハ当くども。そんなるまでる男婦よ奉て
世話をして安ろのとまもの通ぼ。お柳ハ嫁婦ぶそ
のまで鳥をころして寝ることりと考くねふとりぶ
「どのもそんなる前粥まる不間をりてハ

たそーが付ぬ。そーそーぶつ〜こいとのご。とのいってハ自慢らしいが。おまと一所よ暮らしこと
いのうト笑まてよふく〜祝〜そふよ　表「アイ
裏「おまぶよふまふつくうる者をそんなまよまぐ
おつふといのも。よく〜深の縁ぐあるぐろう
ぶ。そまハそも紫ねくるぐ。浮世の義理といの
夏をよく没分てみませく。そまハ宿ちあくの藁の
のも。いやぐといのでハねくぐ爰の所ぐ　裏「お祈ぎ

へ義理ぐ立ぬとおのひますうう。私ハりふくいと
切つくおつとますうら。何すおつーやつくくぐさり
まするおうこのおつしやるとふりよいこーますト。
ぶくくふくるぐら。そのまく侍息ハ絶まけり。

第　六　回

裏次郎ハ行をつぐて侍よある白湯を沸て
見てもおくまぐ抱おこし。おつりたぐうる小麦
ようり一おちげやくト粟を呑せ胸をさそつく



ゆきこども一向よ氣てゆぎて
ゑよ汗をゆぎる斗りあと
無樣お栃をおとす 茂「稱
くおきてくんヨト おとと
ゑ家殘らずちうていまぢも
今目のさめてふりをして
栃「ハイ 何でありまして 茂「沢
ハ話で ゆーて呼せるからの。

愛へ來くどのどいくゆう
よちくくんまたなぐ 栃「お
ちげさんどゆるまちてへト
ちらをきてうぢう。いゆく
ちく呼くども 茂次郎ぶん
の内も。ちげぶんの内も
さろーてんまび氣の毒と
ちまぐよ 奴 袍ちまぐら。

扨一旦拾ひ上げどの〳〵このでありますく
入組ぐいるが。お主が婚つく内へ丹こと女房さいふ
この八代おちげごと。そなたお主を亡き麻く最金を拾ひて
こんなよ癒おとろくるのごよ。そなたらおまもろく
組をいろく。こそも夫婦ふまハるまこねくらるを
反乗して内へいろく組をあつく。おまごるハとも
るの嫁ごとおのくくるせへ。その代アるを私も
外よ見事もねへ〳〵。生月捨ハ者へくらといつ

たゞ氣よでもさうくこそもでいるものはず。海でまり
いろ〳〵どの者さのごと。ちろく居るうちこふまろご。
業ものまをてごどもも通りそなもなく。まやく
氣のつくようる者このめごは乳遣きんよ三沢ご
組へ灸でもまくよろ一どゝてめろくよそんる
変ごるるのめろあるごぶあんまり情ぶごろら。
可愛そなよ。り是で死んでごも者まろくは覚
拾ばせ。お前さんよ来よ夜分きますト せ

ゐる中ゑとりまぜて。おこめどろ〳〵の塩氣のひつ
くり返〳〵をいひながら「おまげさん〳〵」ト猫をお
ていて。且那と主人をそろ〳〵ふぐ〳〵。ろろ〳〵く
たろて居ます称ト二人〳〵て菜を垂れよのまぜる
のを。歯をくひ赤ばりてちつとものどく通〳〵ぬ猫の
うち。嚴次郎も今更愛そふて。のの様
いの主人ぬ。此場の仕置。お称ハ自分の猫をあげて。
おまげを赤つうりと抱きこうぐら称「且那へとふて

猫をあつこめて居ます〳〵。あるこ菜をのまして
おあげるさのまま〳〵よ 称「ヲイ〳〵ト垂れよ口をあけて
一口呑せると。菜ぐ納つこゆ〳〵 称「おまげさん 称「お
まげ〳〵ト呼ぶ変よ。仏分しや目を開き 称「お称
さえ〳〵トいつこまりでさす氣の毒そふな様を
二人〳〵ハ見て一ようふく氣がつのこそ〳〵ぐ 称「おまげさ
氣をさ〳〵ろよおれ〳〵よ且那のゝハ私ぐどふです
赤てあけよふら早く病氣のようくるとふよ

おるりよ　きぶ　お柳さんよ　何と　新ぶ　食さまを　を
私ハ　ものく　ひ　きろく　きまひます〳〵　こう〳〵　お柳
さん　今まで　あること　お　ゐ〳〵　や〳〵　このハ　ぬ　たく　ぶ
きまつ　やう　堪　て　下さいます〳〵　お柳　「何　そん
なよ　氣の毒よ　おもひ　うん　を　ハ　ありません　せんよ。
何　もう　もみん　ぬ　く　居ます〳〵　あるこの　お　の
内　をさろ〳〵　て　遠　くだり　あります〳〵　私の　ぬ　く
ありますから　後ハ　きます　ぬ〳〵　ぬ　を　戻　く　お　特

よく　深切　表　あらこ　ます　く　ともく　泪　を　ぶ　て
顔　と　家　三人　るぶ　ら　物　を　も　い　ます　よ　い　ら　ぶ　養
郎ハ　両人　の　こと　。　泪　ます　ほ　と　い　く　ま　て　養　「お柳　や　え
とこ　あ　て　五徳　よ　ま　て　白眼　ら　を　て　い　こ　ぶ
夜　斗り　更　く　ま　ハ　寒　〳〵　つ　ま　〳〵　ぬ　く　ぬ　ぶ　ら。
こ　く　今　夜ハ　深　る　ぶ　ひ。　ま　げ　の　る　も　ま　ぶ　ぬ　ま
あるこら　今　こ　ら　格　別　る　を　よ　く　て　養ハ　ま　長
でも　ぬ　く　氣　で　も　晴　〳〵　ま　ぶ　ひ。　そ　の　内　ま　ハ　ぶ　ぬ

ゑるごろうノウ　柳「さやうサ　おまげさんのよふ
な夏女を連れさとる　且那ハ　おーつけ　女の
罪があこりますよ。そこら中を喰ひちらーて
後「十二　おまげをあなぢ　夜でも一ッ呼よ寐こといふ
と　夏でもありハまめ〳〵。なる廉西瓜よ若風の仮ちを
本のお姫さゑでハあるめく〳〵一度まこりろこ入り
外るまを持ぬとりのハ。庁毛地といふのご。よく
つのつくれんる世　柳「その一ト夜も寐るのお人を

まゑ　までよ　めくのハ　城の深く実であり外〳〵。
ごのぞ　元のやうよ　ごまの婦よ　おるり　桜ば世　幸ひ
まこ　ごしん彩　遣さゑもあこびかて　後「どふ〳〵てそんる
自ゆる　ゑ　ゑるものう。ゑく　どのでもいひう。
とんや　今夜ハ三人つッ呼よ　寐ふト。後次郎ハ　廉へ　這入
ば。あと　ふ　ハ二人つくねんと。とりはけ　おまげハ氣の
毒そのよ。物もいこどよ　さ〳〵うおいといる　気を
んてこり　柳「おまげさんそんるよふさハでいぶ

てうく今夜ハおくまさよ。あるこのんなまハ私がうつて
且那をちもいまいぞらあくあげるうら。是うら無
夫まよりのくおちよトいまておあげハ尚又
よお柳がさまだけこゑよ。ことくどのよこぶまて
死ねば。とて。お柳があるうへどあつて義次郎と
夫婦よるくるくおあうと心の内よ。とても浮世よ
偽りもうけまぐ。里育ちのお柳が美理深きこと
よめでく御くと「お柳さん堪忍してくださいま

せ。そんなるよ深切なるお方とおくまず。今まで實を
あつりもせずとのこのハ。さぞお腹が立まくくころう。
義次郎さまがおつしやる通りよいてくますうら。
彼方おのひません。あるこまどのぞ嫁ごこ当つて
下さいまく「お柳「よくまそういつてくださりますと最
も今夫婦よるうらまぬといふハ。ろんのひがう。
此年月のおまくの深切を。あごよハるくぬくう。私が
いくよあよしてあげるうら。今夜ハてくへおよまと下。自

分と義次郎ぶ手へ手へおまげを一ツ所よ寝ん〜
ゐごと義次郎ぶ心のうつるようとこりろ〜〜悲
歎をいりて居る　称「且那へあるまこのようる情色
ハ。かんよ廣の江戸でも。二人とふありませんよ　義「何
のおまぶ情ゑ〜ゑものろ　称「情ハあるが性ゑごねく
おまげさん義「何が性ゑるごそんる夏をいりまずと
わく翌日ハ早のうら。モウ寝るせくトミ人ゑごらいろろ
義やむまぶらん。ゑごろく夜も明けるところ　称

霧にお称ハそうとおきいでゞ。二人を送へ寝ごろ〜。
襟を結よおくの二階へ引き。義次郎とおまげを目
ざと寝せくおく。義次郎ハおごらくるて目を覚
義「お称や一ツふく分くんるトいふ。おまげハ
せんうこうく　称「お称きんハおるこのまゝ　義「お
ゆくでもいひ。一ツふくつけてくんるごとくいろこのご
トいふ。おまげハとりぐ傍へ来く。義をつのぐ
ゆると。夜着の中うらを出て一服の上で　義「モウ

一ッふく　春「ハイトつのぐやる　春「コレおまげちんうまうむいて斗り居ぎごとくへ来る。本丁ハてゝどのうろうこエ　春「太助とちろやとまゆようまーて。竹坊をちりーそろエいの夏でござります　春「ちろまとぢくこぶ地面もごのうようくゆとくつことのふぐゆんうく　春「城でござります。私の化粧料ぢろ残して。あとハみんな上方うゝ来て居まーこ彩ち助とりゝ人と太助がいくよふよーてきまろうことのふ

夏でござります今ハ月毎ぢろ四人奥ふハ竹坊と乳母と小僧ぢろ昔の人ハ居ませんよ　春「ハテ氣の毒ふのんぢ。そまもみんなおゆくがるるんうう。上方うゝ来こ彩きんとゆゝハ落野おゆくゆ必ませ居こそうぢよ。おゆくのひうで嬉つこりぢうゝ。ゆけをおとーてつうひうんぢとりのふ夏ぢ　「どのも仕方がござります　春「いくゝも住ることがありゆき。私がゆのべりことうふ。本町へおゆくぶりて竹坊

を聞へあのく。太助とかうやうのいとまを申り紙帳を
とりて元のやうにまきるを。忽おさまるたまゝごとの
きるを其一たとへ命をもてくもあるこのおろ
そやるを夏八背くゝハどもぎりもせぬが。ゆゑのまりハ
どもりやでどぎりもます 義「ことをこはけて少せる
のをりやごとりのハ。ゆゑ。ハ私ぐりの夏を嫌ねく
紀ゝ。そんるゝらどのでもきるさのとハりのもの〻高
よりやごとりのもまぐ年のりゝねゝらぐ。何の今ぐハ

かけうまひのるいるを。ひづらをそるを夏すねくぐ。おゝくぐ
かさのそのぐゝりのよ。必復をきるさそる「あり
緑のどぎります。何の復をきるすのめ。お釈さその
四潔切ぐ私ハどのいてくゝらとゝろゝト泊よ
くるぐ乃ぐ。かくてお釈ハ結をまひ寄ゝ寄ゝ寄りてうぐひ
ゝ手ゝ。まるをまけ見ぐと世間ぎゝ。ゝれゝ物ぐゝ寄ゝ
男とつまくきくゝ。ゝ夏ゝとゝぐゝ。ゝ入ゝ
かねて当落の一年安の夏ゝ夏ハ女房お社をぐめそゝ。ゝ
きぐゝおのゝ。ゝ。ゝ。

江戸

南仙笑楚満人校

驛亭駒人訂

春川英笑画

瀧亭成書

荒川仁勇傳 後編十冊 楚満人作 英泉画

婦女今川暖

ゑ乃形乃炭月はけ
ゆとをやうの
獨りなぐつめんも
神おやぢるを折し
例はけうをやつぐ
河おつ〜のぶし
乃根をんく予矣
ぶ信ぶく吉を好
蛍人

おとゝ。いまゝんや。今若い人。若はひとへいりうど
の。業平勢まとをとも。庵乃。釜蓋。吾妻乃
平安。堂ゝまぐ。飯台の。先生や。白鷺
の雅兄よ。おとゝだんや。近頃。ゝそのうされ。
手も。戯作者のあゝ。ゝるみもあるは
ゝど。ゝ子は。新著乃。小説へ。ゝ。将
軍をうけるも。汐ゝれど。おまゝす。家よ
汗ゝる。紫ゝ。身が。順りの。ゝ。書ハ。

前編つゞきよ。後編の。徑路をもつけ
ざるゝの。多きが。ゆゑ。ゝ。根継普請
といかの。ふ。彷彿として。彼の。鵠といふ。獣
の。形よひとゝ。ゝん。さまゝ。ゝ。足切若
なる。看官ハ。ゝ。形大刀をうち。何のかのと
いまゝを。閑もいぐ。侵いゝ。男ハそれを
ゝまぐとゝ。いまよ。主人ハ。ゝ。手も。切
落しの。騒きをゝ。ゝ。ゝよあゝねど。原来手ぶ

筆ぶかうして名を呼むとわ〳〵もあり〳〵ぎまぶ。
大勝日も元日も股引ぐけぎ風呂敷かさげ。
絶日四方を矢まうまぶ。そぐみぐひとて拙作
です。彫板元ぐあまぶとを。作者すべ素
あるとに十三ぐ勧進も。喰つぐ為永風流三
昧懇ん深きあるべの先を間。家業の一助
に作者のまねうこと。その楽屋をぶろ〳〵る。
何うといふ人あいたゝ〳〵ぐ

通ぐ。野下も暑ろいたりたりこ。
まあ〳〵是ぐ不佞徒継唯ゝとゝ浪く維時
文政八酉仲秋望夜

東都　文亭主及綾継題

江戸書房
永壽堂 西村屋与八
三林堂 中村屋幸藏